

農業経営基盤の強化の促進に関する基本的な構想

令和5年9月

津別町

目 次

- 第1 農業経営基盤の強化の促進に関する目標
 - 1 津別町農業の概況
 - 2 津別町農業の現状と課題
 - 3 農業経営基盤の強化の促進に関する取組方向
 - 4 新たに農業経営を営もうとする青年等の育成・確保に関する目標

- 第2 農業経営の規模、生産方式、経営管理の方法、農業従事の態様等に関する営農の類型ごとの効率的かつ安定的な農業経営の指標

- 第3 農業経営の規模、生産方式、経営管理の方法、農業従事の態様等に関する営農の類型ごとの新たに農業経営を営もうとする青年等が目標とすべき農業経営の指標

- 第4 第2及び第3に掲げる事項のほか、農業を担う者の確保及び育成に関する事項
 - 1 農業を担う者の確保及び育成の考え方
 - 2 津別町が主体的に行う取組
 - 3 関係機関との連携・役割分担の考え方
 - 4 就農等希望者のマッチング及び農業を担う者の確保・育成のための情報収集・相互提供

- 第5 効率的かつ安定的な農業経営を営む者に対する農用地の利用の集積に関する目標その他農用地の効率的かつ総合的な利用に関する事項
 - 1 効率的かつ安定的な農業経営を営む者に対する農用地の利用の集積に関する目標
 - 2 その他農用地の効率的かつ総合的な利用に関する事項

- 第6 農業経営基盤強化促進事業に関する事項
 - 1 第18条第1項の協議の場の設置の方法、第19条第1項に規定する地域計画の区域の基準その他第4条第3項第1号に掲げる事業に関する事項
 - 2 農用地利用改善事業の実施の単位として適当であると認められる区域の基準その他農用地利用改善事業の実施の基準に関する事項
 - 3 津別町農業協同組合が行う農作業の委託のあっせんの促進その他の委託を受けて行う農作業の実施の促進に関する事項
 - 4 その他農業経営基盤強化促進事業の実施に関し必要な事項
 - 5 農地中間管理機構が行う特例事業に関する事項

- 第7 その他

第1 農業経営基盤の強化の促進に関する目標

1 津別町農業の概況

津別町は、北海道の東部、オホーツク海に面するオホーツク総合振興局管内の東南部に位置し、総面積716.60km²でその86%を山林が占め、扇状に広がる河川流域に農村集落が形成されている典型的な中山間地域である。経営形態は小麦・てん菜・馬鈴薯・豆類の耐冷作物を主体とした畑作を中心とし、酪農・畜産を含めた土地利用型農業を展開し、林業と並ぶ町の基幹産業として発展してきた。

2 津別町農業の現状と課題

農業生産の展開を継続していくためには、優良農地の確保を図ることを基本として、農業振興地域整備計画に則し、引き続き、農村地域の秩序ある土地利用の確保に努めていかなければならない。

当町の農家戸数については、平成27年に157戸であった戸数が、令和2年では145戸(▲7.6%)と年々減少し続けている。この間、農地の流動化については、規模拡大志向農家及び農地所有適格法人(農地法(昭和27年法律第229号)第2条第3項に規定する「農地所有適格法人」をいう。)への農地流動化が顕著に推移してきたが、今後も農業従事者の高齢化及び減少が続くものと考えられ、これに伴って、受け手のない農地の一部遊休化が懸念される。

このような地域農業の現状及びその見通しの下に、人材の育成・確保や生産基盤の強化、スマート農業の加速化など、担い手が力強く活躍し、魅力ある持続可能な農業を確立していくことが求められている。将来(概ね10年後)の農業経営の発展の目標を明らかにし、効率的かつ安定的な農業経営を育成することとする。

3 農業経営基盤の強化の促進に関する取組

(1) 基本的な考え方

津別町農業が持続的に発展していくためには、関係機関が連携し、地域の実情に応じて、家族経営をはじめとする農業経営体が経営体質と生産基盤の強化を図りながら、農業生産額の増大や生産コストの縮減による農業所得の増大と6次産業化による農業経営の多角化の取組を推進するとともに、農業経営体を支える営農支援組織の育成を行うなど、効率的かつ安定的で多様な農業経営を育成・確保し、これらの担い手への農用地の利用集積・集約化を促進する。

また、持続可能な開発目標(SDGs)の目標の一つである持続可能な農業生産を進めるため、環境と調和した農業を推進する。

(2) 効率的かつ安定的な農業経営の目標とする所得水準及び労働時間

農業が職業として選択できる魅力のあるものとするため、津別町及びその近隣の市町村において既に実現している優良な経営の事例を踏まえ、主たる従事者が、地域における他産業従事者と遜色のない年間労働時間の水準を達成しつつ、他産業従事者並みの生涯所得に相当する年間農業所得を確保できる効率的かつ安定的な農業経営の育成・確保に努める。

なお、目標とする所得水準及び労働時間は次のとおりとする。

目標年間農業所得	主たる従事者1人当たり おおむね450万円
目標年間労働時間	主体従事者1人当たり 1,700～2,000時間 程度

(3) 新たに農業経営を営もうとする青年等の目標とする所得水準及び労働時間

自ら農業経営を開始しようとする青年等（法人の場合にあっては主たる従事者）の経営開始5年後における所得水準及び労働時間は、(2)に定めるものをおおむね達成することを目標とする。

ただし、農外からの就農者や農家子弟のうち親から独立した経営を開始する者にあつては、経営が安定するまで時間を要することから、経営開始後の所得水準については、おおむね5割の達成を目標とする。

(4) 効率的かつ安定的な農業経営の育成・確保

ア 認定農業者制度の活用

効率的かつ安定的な農業経営の改善を促進するため、認定農業者制度を活用し、農業経営改善計画の作成指導や認定後の農業経営改善計画達成に向け、町や農業委員会、農業協同組合、農業改良普及センターなど地域の関係機関・団体による指導・助言、女性や若い世代、高齢者の能力を活かすための夫婦・親子間の農業経営改善計画の共同申請を推進する。

また、認定農業者等の担い手が主体性と創意工夫を発揮しながら経営発展できるよう、担い手への農用地の利用集積・集約化やICT*等の省力化技術の導入等の推進及び経営所得安定対策、低利融資制度など各種支援施策の活用を支援する。

※ICTは、Information and Communication Technology(情報通信技術)の略

イ 農業経営の法人化の推進

農業経営の法人化は、経営管理の高度化や安定的な雇用の確保、地域の農地や優れた技術の円滑な継承など経営安定・発展の効果が期待されることから、税理士等の専門家や先進的な農業者による指導等を通じ、法人化のメリットや手続、財務・労務管理に関する情報やノウハウ等の普及啓発によって、農業経営の法人化を推進する。

また、民間企業等の経営力や資本力を活かした地域の農業者・関係者との有機的な取組を推進する。

このため、令和12年度（2030年度）における農業法人数を5,500経営体とする北海道農業経営基盤強化促進基本方針の目標などを踏まえ、津別町の令和12年度（2030年度）における農業法人数の目標数を41経営体（令和3年1月現在：40経営体）とし、農業経営の法人化を推進する。

ウ 集落営農の組織化・法人化の推進

経営規模が小さな水田地帯や、農業従事者の高齢化、担い手不足が深刻化し、今後の地域農業を担うこととなる個別経営や法人経営の育成・確保が難しい地域においては、農用地利用改善団体が中心となって、集落の現状と将来についての話し合い活動を重ね、担い手の明

確化や農用地の利用集積の方向を定める取組を推進することにより、集落営農の組織化、及び将来的な集落営農の法人化を推進する。

エ 新規就農者の育成・確保

津別町農業が、将来に向け持続的に発展していくためには、次代を担う新規就農者の育成・確保を図る必要があるため、農業への理解の醸成と関心の喚起に向けた取組を推進するほか、雇用就農を含めた就農促進に向けた情報提供や相談活動に取り組むことが重要である。

また、優れた経営感覚を身につけ、就農後における早期の経営安定、地域への定着を図るため、農業改良普及センターによる技術・経営指導並びに指導農業士等との連携など地域の研修体制の充実・強化等により、就農から経営安定までの総合的な支援体制を強化する。

就農希望者の経営に必要な農地や機械等の確保及び初期投資等による負担軽減のため、各種支援策の活用を推進する。

家族経営体における経営移譲や第三者経営継承、組織経営体の構成員の世代交代など、次の世代の担い手へ地域の農地や優れた技術を円滑に継承する取組を推進する。

オ 労働力不足への対応

農家戸数の減少や農業従事者の高齢化などによる慢性的な労働力不足に対応するため、若者、女性、他産業を退職した人材をはじめ、農業を副業とする人材や外国人材などの多様な人材の確保と、障がい者の社会参画と農業経営の発展の双方を実現する「農福連携」により、雇用労働力の安定的な確保に向けた取組を推進する。

また、ロボット技術やICTの活用等、近年の進歩が著しく、構造的問題などの解決が期待されるスマート農業などの省力化生産技術、労働力不足に対応した生産技術等を積極的に推進する。

カ 女性農業者が活躍できる環境づくり

農業・農村の活性化につながる女性の経営・社会参画を促進するため、女性農業者の経営管理や生産技術等の向上、若い世代の女性農業者のネットワーク強化やグループ活動の活性化等により、女性農業者が活躍できる環境づくりを進め、持続可能な開発目標(SDGs)の目標の一つである男女平等参画や女性の活躍を推進する。

(5) 農用地の利用集積と集約化

「地域計画*」の策定及び実現に向けて、地域計画推進事業、農用地利用改善事業、農地中間管理事業、農地中間管理機構（農地中間管理事業の推進に関する法律（平成25年法律第101号）第2条第4項に規定する農地中間管理機構をいう。以下同じ。）の特例事業等の農地流動化施策を推進し、効率的かつ安定的な農業経営への計画的な農用地の利用集積・集約化を促進する。

※ 地域計画は、これまでの人・農地プランを基礎として、農業経営基盤強化促進法（昭和55年法律第65号）第19条の規定に基づき、農業者等の協議の結果を踏まえ、農業の将来の在り方や農用地の効率的かつ総合的な利用に関する目標として農業を担う者ごとに利用する農用地等を表示した地図などを明確化し、市町村により公表されるもの。

(6) 多様な農業経営の育成・確保

高収益作物やクリーン・有機農業の導入による農業経営の複合化や、農畜産物の加工や直接販売、ファームインといった6次産業化による多角化など、自らの創意工夫を活かした多様な農業経営の育成・確保を図る。

(7) 営農支援体制の整備

生産性の向上や労働負担の軽減などを図るため、コントラクター、TMRセンター及び酪農ヘルパーなどの営農支援組織の育成や体制整備を推進し、共同作業体系の確立、オペレーターなどの雇用のマッチングに向けた取組を推進するなど、多様な人材の確保と円滑な運営を促進する。

4 新たに農業経営を営もうとする青年等の育成・確保に関する目標

(1) 新規就農の現状と統合

津別町の令和2年度の新規就農者は1人であり、過去5年間の累計は3人となっており、農畜産物の生産量の維持・拡大を図っていくため、将来にわたって地域農業の担い手を安定的かつ計画的に確保していく必要がある。

(2) 新たに農業経営を営もうとする青年等の確保に関する目標

(1)に掲げる状況を踏まえ、津別町は青年層に農業を職業として選択してもらえるよう、将来（農業経営開始から5年後）の農業経営の発展の目標を明らかにし、新たに農業経営を営もうとする青年等の育成・確保を図っていくものとする。

ア 確保・育成すべき人数の目標

国が掲げる新規就農し定着する農業者を年間1万人から2万人に倍増するという新規就農者の確保・定着目標や北海道農業経営基盤強化促進基本方針に掲げられた年間670人の新規就農者の育成・確保目標を踏まえ、津別町においては年間2人以上の青年等の確保と現在の雇用就農の受け皿となる法人の増加を目標とする。

イ 新たに農業経営を営もうとする青年等の労働時間・農業所得に関する数値目標

自ら農業経営を開始しようとする青年等（法人の場合にあっては主たる従事者）の経営開始5年後における所得水準及び労働時間は、津別町及びその近隣市町村において既に実現している優良な経営の事例を踏まえ、主たる従事者が、地域における他産業従事者と遜色のない年間労働時間（主たる従事者1人あたり2,000時間程度）及び他産業従事者並みの生涯所得に相当する年間農業所得（主たる従事者1人あたりの年間農業所得450万円程度）を目標とする。

ただし、このうち農外からの就農者や農家子弟のうち親から独立した経営を開始する者にあっては、経営が安定するまで時間を要することから、経営開始5年後の所得水準は、主たる従事者1人あたりの年間農業所得225万円程度を目標とする。

第2 農業経営の規模、生産方式、経営管理の方法、農業従事の態様等に関する営農の類型ごとの効率的かつ安定的な農業経営の指標

第1の3の(2)に示した目標を達成しうる効率的かつ安定的な農業経営の指標として、津別町又は周辺市町村で展開している優良事例を踏まえつつ、津別町における主要な営農類型についてこれを示すと次のとおりである。

[個別経営体]

営農類型	畑作専業		経営規模	50.0ha
------	------	--	------	--------

◎ 畑作物の徹底した低コスト生産による所得向上

- ・ICT機器を活用した作業効率向上と保守管理の徹底による低コスト化を推進
- ・1区画単位の大規模ほ場による主要畑作4品の輪作体系の確立
- ・緑肥作物や堆肥等有機質の投入による地力の向上とクリーン農産物の生産体制確立
- ・土壌診断結果に基づく適正な施肥による生産コストの低減

経営規模	生産方式	経営管理方法	農業従事態様等
<p><作付面積等></p> <ul style="list-style-type: none"> ・小麦 13.0ha ・馬鈴しょ 澱源 13.0ha ・てん菜 7.0ha ・大豆 7.0ha ・小豆 5.5ha ・菜豆 4.5ha <p>経営面積計 50.0ha (うち借地 2.7ha)</p>	<p><機械施設装備></p> <ul style="list-style-type: none"> ・トラクター (90ps) 2台 ・総合播種機 1台 ・ビート移植機 (4条) 1台 ・ビートハーベスター 1台 ・ポテトプランター 1台 ・ポテトハーベスター (澱) 1台 ・大豆コンバイン 1台 ・ブロードキャスター (可変施肥) 1台 ・動力噴霧機 1台 ・その他作業機 一式 ・農用トラック (4tタンク) 1台 ・自脱型コンバイン JA所有 <p><スマート農業技術></p> <ul style="list-style-type: none"> ・自動操舵システムによる省力化 ・可変施肥技術導入による施肥量の軽減 <p><その他></p> <ul style="list-style-type: none"> ・4年輪作 ・堆肥等の有機物投入により土づくりの推進 ・てん菜直播を導入 	<ul style="list-style-type: none"> ・パソコンによる経営計画・労務・財務・ほ場管理 ・青色申告の実施 ・作業記録の整備 ・作物別原価の把握と分析 ・市場動向に的確に対応した計画的生産・販売 	<p><労働力></p> <ul style="list-style-type: none"> ・家族 3名 5,600時間 ・臨時雇用 2人 160時間 <p>(主たる従事者 2,000時間/1人)</p> <p><経営収支></p> <ul style="list-style-type: none"> ・農業粗収益 4,700万円 ・農業経営費 3,760万円 ・農業所得 960万円 <p>(主たる従事者 700万円/1人)</p>

営農類型	畑作・野菜複合		経営規模	27.2ha
------	---------	--	------	--------

◎ 畑作・野菜の輪作による所得向上

- ・ICT機器を活用した作業効率向上と保守管理の徹底による低コスト化を推進
- ・緑肥作物や堆肥等有機質の投入による地力の向上とクリーン農産物の生産体制確立
- ・土壌診断結果に基づく適正な施肥による生産コストの低減

経営規模	生産方式	経営管理方法	農業従事態様等
<p><作付面積等></p> <ul style="list-style-type: none"> ・小麦 7.0ha ・馬鈴しょ 種子 5.0ha ・てん菜 7.0ha ・大豆 1.5ha ・玉ねぎ 6.0ha ・かぼちゃ 0.7ha <p>経営面積計 27.2ha (うち借地 3.4ha)</p>	<p><機械施設装備></p> <ul style="list-style-type: none"> ・トラクター (70~100ps) 3台 ・ビート移植機 (4条) 1台 ・ビートハーベスター 1台 ・ビートタッパー 1台 ・ポテプランター 1台 ・玉ねぎ移植機 1台 ・オオンハーベスター 1台 ・真空播種機 1台 ・ビーンハーベスター 1台 ・ブロードキャスター (可変施肥) 1台 ・スプレヤー (1,800ℓ) 1台 <ul style="list-style-type: none"> ・トラクター (150ps) } 共同 ・ポテハーベスター (2畦) } 利用 <ul style="list-style-type: none"> ・その他作業機 一式 ・農用トラック (4tダンプ) 1台 ・タイヤショベル 1台 ・自脱型コンバイン JA所有 <p><スマート農業技術></p> <ul style="list-style-type: none"> ・自動操舵システムによる省力化 ・可変施肥技術導入による施肥量の軽減 <p><その他></p> <ul style="list-style-type: none"> ・4年輪作 ・堆肥等の有機物投入により土づくりの推進 ・てん菜直播を導入 	<ul style="list-style-type: none"> ・後継者の育成 ・パソコンによる経営計画・労務・財務・ほ場管理 ・青色申告の実施 ・作目間の労働調整 ・作業記録の整備 ・市場動向に的確に対応した計画的生産・販売 	<p><労働力></p> <ul style="list-style-type: none"> ・家族 3名 5,800時間 <p>(主たる従事者 2,000時間/1人)</p> <p><経営収支></p> <ul style="list-style-type: none"> ・農業粗収益 3,500万円 ・農業経営費 2,360万円 ・農業所得 1,140万円 <p>(主たる従事者 780万円/1人)</p>

営農類型	酪農専業 I (集約放牧)		経営規模	経産牛 60頭	54.0ha
------	---------------	--	------	---------	--------

◎ 集約放牧型酪農による所得向上

- ・繋留パイプライン牛舎の飼育で、集約放牧方式による草地高度活用
- ・粗飼料収穫調整作業の委託、酪農ヘルパーなど地域支援システムの活用
- ・堆肥等の適正処理によるクリーン酪農生産体制の確立

経営規模	生産方式	経営管理方法	農業従事態様等
<作付面積等> ・牧草採草 30.0ha ・牧草放牧 14.0ha ・サイレージ用 とうもろこし 10.0ha 経営面積計 54.0ha <飼養頭数> ・経産牛 牝 60頭 ・育成牛 牝 45頭 常時飼養頭数 105頭	<機械施設装備> ・牛舎 1棟 ・搾乳舎 1棟 ・育成舎 1棟 ・ふん尿処理施設 1棟 ・バンカーサイロ 1基 ・乾草舎 1棟 ・トラクター (70~100ps) 1台 ・トラクター (150ps) 1台 ・タイヤショベル 2台 ・モアコンテナイシュナー 1台 ・ロールベアラー 2台 ・フォーレージハーベスター 1台 ・コンハーベスター 1台 ・ミキシングワゴン 1台 ・バルククーラー 1台 ・パイプラインミルク 6台 ・その他作業機 一式 ・農用トラック (4t) 1台	・パソコンによる 経営計画・労務 ・財務・ほ場管 理 ・青色申告の実施 ・乳検データの 活用 ・作業記録の整備 ・各種経営管理ツ ルを活用した経 営改善 ・飼養部門と飼料 生産部門の損益 と原価の把握分 析	<労働力> ・家族 2名 4,000時間 ・雇用 400時間 (主たる従事者 2,000時間/1人) <経営収支> ・農業粗収益 4,580万円 ・農業経営費 3,600万円 ・農業所得 980万円 (主たる従事者 520万円/1人)

営農類型	酪農専業Ⅱ（フリーストール）	経営規模	経産牛 30頭	37.0ha
------	----------------	------	---------	--------

◎ 省力方式による労働生産性の向上

- ・フリーストール方式による飼養
- ・TMRセンター利用による良質飼料の確保及び労働力の軽減
- ・酪農ヘルパーなど地域支援システムの活用
- ・堆肥等の適正処理によるクリーン酪農生産体制の確立

経営規模	生産方式	経営管理方法	農業従事態様等
<作付面積等> ・牧草採草 18.0ha ・牧草放牧 15.0ha ・サイレージ用 とうもろこし 4.0ha 経営面積計 37.0ha （うち借地 3.0ha） <飼養頭数> ・経産牛 牝 30頭 ・育成牛 牝 30頭 常時飼養頭数 60頭	<機械施設装備> ・フリーストール牛舎 1棟 ・パーラー舎 1棟 ・育成舎 1棟 ・堆肥舎 1棟 ・乾草舎 1棟 ・トラクター（50～70ps） 2台 ・トラクター（70～100ps） 1台 ・モアコンディショナー 1台 ・ロールバレー 1台 ・フォーレージハーベスター 1/3台 ・バルククーラー 1台 ・パイプラインミルク 6台 ・その他作業機 一式 ・農用トラック（4t） 1台 ・タイヤショベル 1台	・作業の外部化により搾乳作業に特化 ・パソコンによる経営計画・労務・財務・ほ場管理 ・青色申告の実施 ・乳検データの活用 ・作業記録の整備 ・各種経営管理ツールを活用した経営改善 ・飼養部門と飼料生産部門の損益と原価の把握分析	<労働力> ・家族 2名 4,000時間 ・雇用 240時間 （主たる従事者 2,000時間/1人） <経営収支> ・農業粗収益 4,440万円 ・農業経営費 3,000万円 ・農業所得 1,440万円 （主たる従事者 720万円/1人）

営農類型	肉牛専業Ⅰ（黒毛肥育）		経営規模	肥育牛290頭	17.0ha
------	-------------	--	------	---------	--------

◎ 飼養管理のコスト削減と安定出荷による所得向上

- ・肥育牛のグループ化によるストレス低減で効率的な肥育（出荷体重 670 kg、格付 A4）
- ・衛生プログラムによる事故率の低減
- ・堆肥センターなど地域支援システムの活用

経営規模	生産方式	経営管理方法	農業従事態様等
<作付面積等> ・牧草採草 13.0ha ・サイレージ用 とうもろこし 4.0ha 経営面積計 17.0ha <飼養頭数> ・肥育牛（黒毛） 180頭 ・繁殖牛（黒毛） 85頭 ・育成牛（黒毛） 25頭 常時飼養頭数 290頭	<機械施設装備> ・肥育牛舎 2棟 ・繁殖牛舎 1棟 ・育成牛舎 1棟 ・分娩牛舎等 1式 ・堆肥舎 1式 ・哺乳ロボット 1台 ・トラクター 2台 ・ホイルローダー 2台 ・農用トラック（4t） 1台 ・その他作業機 一式 <スマート農業技術> ・哺乳ロボットによる省力化	・コンサルティングを活用した飼料給与 ・パソコンによる経営計画・労務・財務・ほ場管理 ・青色申告の実施 ・作業記録の整備 ・各種経営管理ツールを活用した経営改善 ・飼養部門と飼料生産部門の損益と原価の把握分析	<労働力> ・家族 3名 5,500時間 （主たる従事者 2,000時間/1人） <経営収支> ・農業粗収益 20,500万円 ・農業経営費 16,000万円 ・農業所得 4,500万円 （主たる従事者 2,000万円/1人）

営農類型	肉牛専業Ⅱ (牝・F1肥育素)		経営規模	肥育素牛585頭	6.0ha
------	--------------------	--	------	----------	-------

◎ 省力飼養管理技術による労働生産性向上

- ・月齢別牛群管理と多頭化に対応した省力飼養管理技術によるコスト低減
- ・衛生プログラムによる事故率の低減
- ・堆肥センターなど地域支援システムの活用

経営規模	生産方式	経営管理方法	農業従事態様等
<作付面積等> ・サレージ用 とうもろこし 6.0ha 経営面積計 6.0ha <飼養頭数> ・牝肥育素牛（出荷頭数） 800頭 ・F1肥育素牛（出荷頭数） 100頭 出荷頭数 900頭 常時飼養頭数 585頭	<機械施設設備> ・育成舎 2棟 ・バンカーサイロ 1基 ・堆肥舎 1棟 ・トラクター 1台 ・タイヤショベル 1台 ・農用トラック（4t） 1台 ・その他作業機 一式	・パソコンによる 経営計画・労務 ・財務・ほ場管 理 ・青色申告の実施 ・作業記録の整備 ・各種経営管理ツ ルを活用した経 営改善 ・飼養部門と飼料 生産部門の損益 と原価の把握分 析	<労働力> ・家族 2名 4,000時間 （主たる従事者 2,000時間/1人） <経営収支> ・農業粗収益 22,400万円 ・農業経営費 20,800万円 ・農業所得 1,600万円 （主たる従事者 1,000万円/1人）

[法人経営体]

営農類型	法人（畑作・野菜複合）		経営規模	199.0ha
------	-------------	--	------	---------

◎ 組織経営で経営の効率化と多角化による安定経営

- ・ICT機器を活用した作業効率向上と保守管理の徹底による低コスト化を推進
- ・主要畑作4品+野菜の輪作体系の確立・組織経営体による多様な農業展開の推進
- ・緑肥作物や堆肥等有機質の投入による地力の向上とクリーン農産物の生産体制確立
- ・土壌診断結果に基づく適正な施肥による生産コストの低減

経営規模	生産方式	経営管理方法	農業従事態様等
<p><作付面積等></p> <ul style="list-style-type: none"> ・小麦 78.0ha ・馬鈴しょ 29.0ha ・てん菜 66.0ha ・小豆 6.0ha ・玉ねぎ 20.0ha <p>経営面積計 199.0ha (うち借地 51.5ha)</p>	<p><機械施設装備></p> <ul style="list-style-type: none"> ・トラクター（100-150ps） 5台 ・トラクター（150ps） 4台 ・総合播種機 3台 ・自脱型コンバイン 1台 ・ビート移植機（4条） 2台 ・ベツトフォーマー 1/2台 ・コンピスター 1/2台 ・ポテプランター 1台 ・ポテハーベスター 1台 ・玉ねぎ移植機 3台 ・オニオンハーベスター 2台 ・大豆コンバイン 1台 ・ブロードキャスト（可変施肥） 2台 ・スプレヤ（6,000ℓ） 1台 ・その他作業機 一式 ・農用トラック（4tダンプ） 1台 ・タイヤショベル 2台 ・事務所 1棟 <p><スマート農業技術></p> <ul style="list-style-type: none"> ・自動操舵システムによる省力化 ・可変施肥技術導入による施肥量の軽減 <p><その他></p> <ul style="list-style-type: none"> ・4年輪作 ・てん菜直播を導入 ・馬鈴しょリールコンディショニングシステムの導入 	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の農地を集積し、省力技術を導入した協業経営 ・若手構成員の担い手育成機能 ・パソコンによる経営計画・労務・財務・ほ場管理、青色申告の実施 ・作目別原価の把握と分析 ・市場動向把握による計画的生産・販売 ・作目間の労働調整 ・労務管理（人事、教育、福利厚生等）の充実 	<p><労働力></p> <ul style="list-style-type: none"> ・家族 12名 19,000時間 ・臨時雇用 16名 1,600時間 <p>（主たる従事者 1,800時間/1人）</p> <p><経営収支></p> <ul style="list-style-type: none"> ・農業粗収益 27,300万円 ・農業経営費 22,000万円 ・農業所得 5,300万円 <p>（主たる従事者 1,320万円/1人）</p>

営農類型	酪農専業（フリーストール）		経営規模	経産牛150頭	165.0ha
------	---------------	--	------	---------	---------

◎ICTを活用した省力方式で大規模酪農による所得向上

- ・フリーストール方式、ミルクパラー方式による省力化
- ・搾乳ロボット、自動給餌機の導入による省力化
- ・TMRセンター利用による良質飼料の確保及び労働力の軽減
- ・堆肥等の適正処理によるクリーン酪農生産体系の確立

経営規模	生産方式	経営管理方法	農業従事態様等
<作付面積等> ・牧草採草 120.0ha ・サイレージ用 とうもろこし 45.0ha 経営面積計 165.0ha (うち借地 165.0ha) <飼養頭数> ・経産牛 150頭 ・育成牛 120頭 常時飼養頭数 270頭	<機械施設装備> ・フリーストール牛舎 1棟 ・ミルクパラー 1棟 ・育成牛舎 1棟 ・哺育牛舎 1棟 ・飼料保管庫 2棟 ・ミルクシステム(ロータリー 24P) 1式 ・バルククーラー(8,000ℓ) 2台 ・カーペン 1式 ・バンクリーナー 1式 ・スリッパ 1基 ・自動給餌機 1台 ・ホイルローダー 1台 ・スリッタンカー 1台 ・トラクター 1台 ・その他作業機 一式 <スマート農業技術> ・搾乳ロボット、自動給餌機による省力化	・作業の外部化により搾乳作業に特化 ・コンサイージを活用した飼料給与 ・パソコンによる経営計画・労務・財務・ほ場管理 ・青色申告の実施 ・乳検データの活用 ・作業記録の整備 ・各種経営管理ツールを活用した経営改善 ・飼養部門と飼料生産部門の損益と原価の把握分析	<労働力> ・構成員 3名 2,700時間 ・雇用 1名 1,200時間 (主たる従事者 1,800時間/1人) <経営収支> ・農業粗収益 17,400万円 ・農業経営費 13,300万円 ・農業所得 4,100万円 (主たる従事者 1,500万円/1人)

第3 農業経営の規模、生産方式、経営管理の方法、農業従事の態様等に関する営農の類型ごとの新たに農業経営を営もうとする青年等が目標とすべき農業経営の指標

第1の3の(3)に示した目標を達成しうる青年等が目標とすべき農業経営の指標は、第2に定めるものと同様である。

ただし、農外からの就農者や農家子弟のうち親から独立した経営を開始する者であっては、指標を例示すると次のとおりである。

営農類型	野菜専業		経営規模	1.5ha
------	------	--	------	-------

◎ 高収益野菜に特化した所得の確保

- ・堆肥等有機質の投入による地力の向上とクリーン農産物の生産体制確立
- ・土壌診断結果に基づく適正な施肥による生産コストの低減

経営規模	生産方式	経営管理方法	農業従事態様等
<作付面積等> ・アスパラ（ハウス） 1.0ha ・アスパラ（露地） 0.1ha ・トマト（ハウス） 0.1ha ・露地野菜 0.3ha 経営面積計 1.5ha	<機械施設装備> ・トラクター（70～90ps） 1台 ・歩行型トラクター 1台 ・農用トラック（軽トラ） 1台 ・動力噴霧器 1台 ・栽培ハウス 10棟	・パソコンによる経営計画・労務・財務・ほ場管理 ・青色申告の実施 ・作目間の労働調整 ・作業記録の整備 ・市場動向に的確に対応した計画的生産・販売	<労働力> ・構成員 2名 3,600時間 （主たる従事者 1,800時間/1人） <経営収支> ・農業粗収益 960万円 ・農業経営費 460万円 ・農業所得 500万円 （主たる従事者 250万円/1人）

営農類型	酪農専業（フリーストール）	経営規模	経産牛 50頭	22.0ha
------	---------------	------	---------	--------

◎ 省力方式による経営の安定

- ・ フリーストール方式による飼養
- ・ TMRセンター利用による良質飼料の確保及び労働力の軽減
- ・ 粗飼料収穫調整作業の委託、酪農ヘルパーなど地域支援システムの活用
- ・ 堆肥等の適正処理によるクリーン酪農生産体制の確立

経営規模	生産方式	経営管理方法	農業従事態様等
<作付面積等> ・牧草採草 20.0ha ・サイレージ用 とうもろこし 2.0ha 経営面積計 22.0ha <飼養頭数> ・経産牛 牝 50頭 ・育成牛 牝 40頭 常時飼養頭数 90頭	<機械施設装備> ・成牛舎 1棟 ・育成牛舎 1棟 ・機械倉庫 1棟 ・堆肥舎 1式 ・尿溜 1式 ・乾草舎 1棟 ・トラクター 1台 ・モアコンディショナー 1台 ・ロールバレー 1台 ・ミキシングワゴン 1台 ・バルククーラー 1台 ・パイプラインミルカー 6台 ・その他作業機 一式 ・農用トラック（2t） 1台 ・ホイールローダー 1台	・パソコンによる 経営計画・労務・ 財務・ほ場管理 ・青色申告の実施 ・乳検データの 活用 ・作業記録の整備 ・各種経営管理ツール を活用した経営 改善 ・飼養部門と飼料 生産部門の損益 と原価の把握分 析	<労働力> ・構成員 2名 4,000時間 （主たる従事者 2,000時間/1人） <経営収支> ・農業粗収益 7,800万円 ・農業経営費 6,800万円 ・農業所得 1,000万円 （主たる従事者 500万円/1人）

第4 第2及び第3に掲げる事項のほか、農業を担う者の確保及び育成に関する事項

1 農業を担う者の確保及び育成の考え方

津別町農業の維持・発展に必要となる効率的かつ安定的な経営を育成するため、生産方式の高度化や経営管理の合理化に対応した高い技術を有した人材の確保・育成に取り組む。このため、認定農業者制度、認定新規就農者制度及びそれらの認定を受けた者に対する各種支援制度を活用するとともに津別町農業協同組合、網走農業改良普及センター美幌支所などの関係機関と連携して研修・指導や相談対応等に取り組む。

また、新たに農業経営を営もうとする青年等の就農を促進するため、これらの青年等に対する就農情報の提供、農地・農業用機械の取得や生活支援などの受入体制の整備、先進的な法人経営等での実践的研修の実施、青年等就農計画の認定・フォローアップ、認定新規就農者向けの支援策の積極的な活用の推進、認定農業者への移行に向けた経営発展のための支援等を行う。

更に、農業従事者の安定確保を図るため、農業従事の態様等の改善、家族経営協定締結による就業制、休日制、ヘルパー制度の導入、高齢者及び非農家等の労働力や繁忙期の異なる産地

間の労働力の活用等に取り組む。

加えて、津別町農業の将来を担う幅広い人材の確保に向け、職業としての農業の魅力等を発信するとともに、雇用されて農業に従事する者、定年退職後に農業に従事する者、他の仕事とともに農業に従事する者など農業生産に関わる多様な人材に対して、地域に定着し活躍できるよう必要な情報の提供、受入体制の整備、研修の実施、交流会の実施等の支援を行う。

2 津別町が主体的に行う取組

当町は、新たに農業経営を営もうとする青年等や農業を担う多様な人材の確保に向けて、津別町農業新規参入者受入協議会が総合的な相談支援窓口となりながら、その他関係機関と連携し、就農等希望者に対する情報提供、住宅の紹介や移住相談対応等の支援、農業技術・農業経営に要する知識習得に向けた研修の実施、必要となる農用地等や農業用機械等のあっせん・確保、資金調達のサポートを行う。

就農後の定着に向けては、販路開拓や営農面から生活面までの様々な相談に対応するための相談対応、他の農家等との交流の場を設けるなど、必要となるサポートを就農準備から定着まで一貫して行う。さらに、新規就農者等が地域で孤立することがないように配慮を行うとともに、地域農業を担う者として当該者を育成するときは、必要に応じて、協議の場への参加や地域計画の修正等の措置を講じる。

また、本構想に基づく青年等就農計画の作成を促し、青年等就農資金や経営体育成支援事業等の国による支援策、県による新規就農関連の支援策等を効果的に活用しながら、確実な定着、経営発展できるよう必要となるフォローアップを行うとともに、青年等就農計画の達成が見込まれる者に対しては、引き続き農業経営改善計画の策定を促し、認定農業者へと誘導する。

3 関係機関との連携・役割分担の考え方

(1) 関係機関の連携・役割分担

農業を担う者の育成・確保に向けては、津別町地域担い手育成センターが各種取組の中心となりながら、総合的な相談支援窓口として津別町農業新規参入者受入協議会を設置し、関係機関・団体が連携して地域における取組を総合的に推進する。

就農に向けた情報提供及び就農相談については津別町農業新規参入者受入協議会、技術や経営ノウハウについての習得及び就農後の営農指導等フォローアップについては津別町農業協同組合、網走農業改良普及センター美幌支所や指導農業士等、農地の確保については津別町農業委員会等が担い、各組織が役割を分担しながら取組を進める。

(2) 認定新規就農者等への指導及び農業経営改善計画作成への誘導

認定就農者等の経営発展を図るため、当町や津別町農業委員会、津別町農業協同組合、網走農業改良普及センター美幌支所などの関係機関が技術や経営指導等についての指導・助言を行うとともに、青年等就農計画の期間を了する者については、更なる経営向上に向けて農業経営改善計画を作成できるよう計画的に誘導する。

4 就農等希望者のマッチング及び農業を担う者の確保・育成のための情報収集・相互提供

(1) 情報収集及び関係機関との情報の相互提供

当町は、農業を担う者の確保のため、関係機関と連携しながら、経営の移譲を希望する農業者の情報を積極的に把握するよう努め、新たに農業経営を開始しようとする者が円滑に移譲を受けられるよう円滑な継承に向けて必要なサポートを行う。

また、区域内における作付け品目毎の就農受入体制、研修内容、就農後の農業経営・収入・生活のイメージ等、就農等希望者が必要とする情報を収集・整理し、必要に応じて関係機関へ情報提供する。

(2) 受入環境の整備

公益財団法人北海道農業公社や網走農業改良普及センター美幌支所、津別町農業協同組合などと連携しながら、就農相談会を定期的開催し、就農希望者に対し、市内での就農に向けた情報（研修、空き家に関する情報等）の提供を行う。また、町内の農業法人や先進農家等と連携して、高校や大学等からの研修やインターンシップの受入れを行う。

(3) 中長期的な取組

生徒・学生が農業に興味関心を持ち、農業が将来の進路の選択肢の一つとなるよう教育機関や教育委員会と連携しながら、各段階の取組を実施する。具体的には、生産者との交流の場を設け、農業体験ができる仕組みをつくることで、農業に関する知見を広められるようにする。

第5 効率的かつ安定的な農業経営を営む者に対する農用地の利用の集積に関する目標その他農用地の効率的かつ総合的な利用に関する事項

1 効率的かつ安定的な農業経営を営む者に対する農用地の利用の集積に関する目標

上記第2に例示するような効率的かつ安定的な農業経営を営む者に対する農用地の利用（農作業受託面積を含む。）の集積に関する目標を、次のとおりとする。

効率的かつ安定的な農業経営を営むものに対する農用地の利用の集積に関する目標	備考
津別町農用地面積の95%程度	

(注)「効率的かつ安定的な農業経営を営む者に対する農用地の利用の集積に関する目標」は、おおむね10年後(R12)を見通して設定し、この場合、農用地の利用には利用権の設定等を受けたもののほか、水稲においては基幹3作業(耕起・代かき、田植え、収穫・脱穀)の全てを受託している面積、その他の作目においては主な基幹作業を受託している面積を含めるものとします。

2 その他農用地の効率的かつ総合的な利用に関する事項

町、農業委員会、農業協同組合等の関係機関・団体が連携し、地域計画の策定を通じて関係者等との協議の場を設けることにより、面としてまとまった形での農用地の集約化を進め、団地面積の増加を図るとともに、担い手への農用地の集積を加速する。

また、地域全体で農用地の確保・有効利用を図るため、中小・家族経営など地域社会の維持

に重要な役割を果たしている経営体の新規就農促進を図るエリアや有機農業の団地化を図るエリア等の設定を検討するとともに、放牧利用や蜜源利用、省力栽培による保全等の取組を進める。

第6 農業経営基盤強化促進事業に関する次に掲げる事項

津別町は、北海道が策定した「農業経営基盤強化促進基本方針」の第5の農業経営基盤強化促進事業の実施に関する基本的な事項に定められた方向に則しつつ、津別町農業の地域特性、即ち、複合経営を中心とした多様な農業生産の展開や兼業化の著しい進行などの特徴を十分踏まえて、農業経営基盤の強化の促進に関する計画である地域計画を定め、その実現に向けて、農地中間管理機構による農地中間管理事業及び特例事業の活用を検討しながら農用地について担い手への集積・集約化を促進し、農用地の効率的かつ総合的な利用の推進を図る。

津別町は、農業経営基盤強化促進事業として、次に掲げる事業を行う。

1 第18条第1項の協議の場の設置の方法、第19条第1項に規定する地域計画の区域の基準その他第4条第3項第1号に掲げる事業に関する事項

協議の場の開催時期については、都度関係機関並びに地区の代表者と協議し、決定するとともに、開催に当たっては、他の農業関係の集まりを積極的に活用しながら、町の広報への掲載やホームページ等での周知に努める。

また、農業上の利用が行われる農用地等の区域については、これまで人・農地プランの実質化が行われている区域を基に、農業振興地域内の農用地等が含まれるように設定することとし、その上で、様々な努力を払ってもなお、農業上の利用が見込めず、農用地として維持することが困難な農用地については、活性化計画を作成し、粗放的な利用等による農用地の保全等を図る。

なお、地域計画の策定に当たっては、関係団体と連携しながら、協議の場の設置から地域計画の公表に至るまで、適切な進捗管理を行うこととし、地域計画に基づいて利用権の設定等が行われているか進捗管理を毎年実施する。

2 農用地利用改善事業の実施の単位として適当であると認められる区域の基準その他農用地利用改善事業の実施の基準に関する事項

(1) 農用地利用改善事業の実施の促進

津別町は、地域農業関係者等が農用地の有効利用及び農業経営の改善のために行う自主的努力を助長するため、地域関係農業者等の組織する団体による農用地利用改善事業の実施を促進する。

(2) 区域の基準

農用地利用改善事業の実施の単位として適当であると認められる区域の基準は、土地の自然的条件、農用地の保有及び利用の状況、農作業の実施の状況、農業経営活動の領域等の観点から、農用地利用改善事業を行うことが適当と認められる地縁的なまとまりのある地域とするものとする。

(3) 農用地利用改善事業の内容

(2)の区域において、地域農業関係者等の組織する団体が、農用地の効率的かつ総合的な利用を図るための、作付地の集団化、農作業の効率化その他の措置及び農用地の利用関係の調整を図るための農用地利用規定を作成し、その基づいて認定農業者等の担い手へ農地の集積を推進するものとする。

(4) 農用地利用規程の内容

① 農用地利用改善事業の準則となる農用地利用規程においては、次に掲げる事項を定めるものとする。

ア 農用地の効率的かつ総合的な利用を図るための措置に関する基本的な事項

イ 農用地利用改善事業の実施区域

ウ 作付地の集団化その他農作物の栽培の改善に関する事項

エ 認定農業者とその他の構成員との役割分担その他農作業の効率化に関する事項

オ 認定農業者に対する農用地の利用の集積の目標その他農用地の利用関係の改善に関する事項

カ その他必要な事項

② 農用地利用規程においては、①に掲げるすべての事項についての実行方策を明らかにするものとする。

(5) 農用地利用規程の認定

① (2)に規定する区域をその区域とする地域関係農業者等の組織する団体で、定款又は規約及び構成員につき法第23条第1項に規定する要件を備えるものは、基本要綱様式第4号の認定申請書を津別町に提出して、農用地利用規程について津別町の認定を受けることができる。

② 津別町は、申請された農用地利用規程が次に掲げる要件に該当するときは、法第23条第1項の認定をする。

ア 農用地利用規程の内容が基本構想に適合するものであること。

イ 農用地利用規程の内容が農用地の効率的かつ総合的な利用を図るために適切なものであること。

ウ (4)の①のエに掲げる役割分担が認定農業者の農業経営の改善に資するものであること。

エ 農用地利用規程が適正に定められており、かつ、申請者が当該農用地利用規程で定めるところに従い農用地利用改善事業を実施する見込みが確実であること。

③ 津別町は、②の認定をしたときは、その旨及び当該認定に係る農用地利用規程を津別町の掲示場への掲示、インターネットの利用その他の適切な方法により公告する。

④ ①から③までの規定は、農用地利用規程の変更についても準用する。

(6) 特定農業法人又は特定農業団体を定める農用地利用規程の認定

① (5)の①に規定する団体は、農用地の保有及び利用の現況及び将来の見通し等からみて農用地利用改善事業が円滑に実施されないと認めるときは、当該団体の地区内の農用地の相当部分について農業上の利用を行う効率的かつ安定的な農業経営を育成するという観点から、当該団体の構成員からその所有する農用地について利用権の設定等若しくは農作業の委託を受けて農用地の利用の集積を行う農業経営を営む法人（以下「特定農業法人」という。）又は当該団体の構成員からその所有する農用地について農作業の委託を受けて農用地の利用の集積を行う団体（農業経営を営む法人を除き、農業経営を営む法人となることが確実であると見込まれること、定款又は規約を有していることなど政令第9条に掲げる要件に該当するものに限る。以下「特定農業団体」という。）を、当該特定農業法人又は特定農業団体の同意を得て、農用地利用規程において定めることができる。

② ①の規定により定める農用地利用規程においては、(4)の①に掲げる事項のほか、次の事項を定めるものとする。

ア 特定農業法人又は特定農業団体の名称及び住所

イ 特定農業法人又は特定農業団体に対する農用地の利用の集積の目標

ウ 特定農業法人又は特定農業団体に対する農用地の利用権の設定等及び農作業の委託に関する事項

③ 津別町は、②に規定する事項が定められている農用地利用規程について(5)の①の認定の申請があった場合において、農用地利用規程の内容が(5)の②に掲げる要件のほか、次に掲げる要件に該当するときは、(5)の①の認定をする。

ア ②のイに掲げる目標が(2)に規定する区域内の農用地の相当部分について利用の集積をするものであること。

イ 申請者の構成員からその所有する農用地について利用権の設定等又は農作業の委託を行いたい旨の申出があった場合に、特定農業法人が当該申出に係る農用地について利用権の設定等若しくは農作業の委託を受けること、又は特定農業団体が当該申出に係る農用地について農作業の委託を受けることが確実であると認められること。

④ ②で規定する事項が定められている農用地利用規程（以下「特定農用地利用規程」という。）で定められた特定農業法人は認定農業者と、特定農用地利用規程は認定計画とみなす。

(7) 農用地利用規程の特例

① (5)の①に規定する団体は、その行おうとする農用地利用改善事業の実施区域を含む周辺の地域における農用地の保有及び利用の現況及び将来の見通し等からみて効率的かつ安定的な農業経営を営む者に対する農用地の利用の集積を図ることが特に必要であると

認めるときは、当該実施区域内の農用地について利用権の設定等を受ける者を認定農業者及び農地中間管理機構に限る旨を、当該認定農業者及び農地中間管理機構の同意を得て、農用地利用規程に定めることができる。

- ② ①の規定により定める農用地利用規程においては、(6)の②に掲げる事項のほか、次の事項を定めるものとする。
- ア 認定農業者の氏名又は名称及び住所
 - イ 認定農業者に対する農用地についての利用権の設定等に関する事項
 - ウ 農地中間管理事業の利用に関する事項
 - エ その他農林水産省令で定める事項
- ③ 津別町は、①の規定により定められる農用地利用規程の申請があったときは、その旨を津別町の掲示場への掲示、インターネットの利用その他の適切な方法により公告し、当該農用地利用規程を当該公告の日から2週間公衆の縦覧に供する。この場合、利害関係人は、当該縦覧期間満了日までに当該農用地利用規程について、津別町に意見書を提出することができる。
- ④ 津別町は、①に規定する農用地利用規程について申請があった場合、(5)の②の要件のほか、次に掲げる要件に該当するとき、津別町は(5)の①の認定を行う。
- ア 農用地利用改善事業の実施区域内の農用地につき1の(8)の権利を有する者(以下「所有者」という。)の三分の二以上の同意が得られていること。
 - イ 農用地利用改善事業の実施区域内の農用地の所有者等から当該農用地について利用権の設定等を行いたい旨の申出があった場合に、当該認定農業者が当該利用権の設定等を受けることが確実であると認められること。
- ⑤ ①に規定する事項が定められている農用地利用規程について、認定を受けた場合には、当該農用地利用規程に係る農用地利用改善事業の実施区域内の農用地の所有者等(農地中間管理機構を除く。)は、当該農用地利用規程において利用権の設定等を受ける者とされた認定農業者及び農地中間管理機構以外の者に対して、賃借権、使用貸借による権利その他の第21条の4で定める使用及び収益を目的とする権利の設定若しくは移転又は所有権の移転を行ってはならない。
- ⑥ ①の認定において、利用権の設定を農地中間管理機構に行う場合の当該利用権の設定等の対価は、当該農用地の位置、形状、環境、収益性等を比較考量し、算出する。
- ⑦ ①の農用地利用規程の有効期間は、認定を受けた日から起算して5年とする。
- ⑧ ①の認定を受けた団体は、毎年6月に農用地利用改善事業の実施状況に関し、必要な報告をすることとする。

(8) 農用地利用規定の変更等

① (5)の②の認定を受けた団体（以下「認定団体」という。）は、(5)の①の認定に係る農用地利用規程を変更しようとするときは、津別町の認定を受けるものとする。

ただし、特定農用地利用規程で定められた特定農業団体が、施行規則第21条の5で定めるところにより、その組織を変更して、その構成員を主たる組合員、社員若しくは株主とする農業経営を営む法人となった場合において当該特定農用地利用規程を変更して当該農業経営を営む法人を特定農業法人として定めようとするとき又は施行規則第22条で定める軽微な変更をしようとする場合はこの限りではない。

② 認定団体は、①のただし書きの場合（施行規則第22条で定める軽微な変更をしようとする場合を除く。）は、その変更をした後、遅滞なく、その変更した農用地利用規程を津別町に届け出るものとする。

③ 津別町は、認定団体が(5)の①の認定に係る農用地利用規程（①又は②の規定による変更の認定又は届出があったときは、その変更後のもの）に従って農用地利用改善事業を行っていないことその他政令第13条で定める事由に該当すると認めるときは、その認定を取り消すことができる。

④ (5)の②及び(6)の③並びに(7)の③及び(7)の④の規定は①の規定による変更の認定について、(5)の③の規定は①又は②の規定による変更の認定又は届出について準用する。

(9) 農用地利用改善団体の勧奨等

① 認定団体は、当該認定団体が行う農用地利用改善事業の実施区域内の農用地の効率的かつ総合的な利用を図るため特に必要があると認めるときは、その農業上の利用の程度がその周辺の当該区域内における農用地の利用の程度に比べ、著しく劣っていると認められる農用地について、当該農用地の所有者（所有者以外に権原に基づき使用及び収益をする者がある場合には、その者）である当該認定団体の構成員に対し、認定農業者（特定農用地利用規程で定めるところに従い、農用地利用改善事業を行う認定団体にあつては、当該特定農用地利用規程で定められた特定農業団体を含む。）に利用権の設定等又は農作業の委託を行うよう勧奨することができる。

② ①の勧奨は、農用地利用規程に基づき実施するものとする。

③ 特定農用地利用規程で定められた特定農業法人及び特定農業団体は、当該特定農用地利用規程で定められた農用地利用改善事業の実施区域内にその農業上の利用の程度がその周辺の当該区域内における農用地の利用の程度に比べ、著しく劣っていると認められる農用地がある場合には、当該農用地について利用権の設定等又は農作業の委託を受け、当該区域内の農用地の効率的かつ総合的な利用を図るよう努めるものとする。

(10) 農用地利用改善事業の指導、援助

① 津別町は、農用地の有効かつ適切な利用を図るため、必要があると認めるときは、農用地利用改善団体となる要件を備える団体に対して、農用地利用規程を定め、農用地利用改善事業を行うよう促す。

② 津別町は、農用地利用改善団体が、農用地利用改善事業の実施に関し、農業委員会、農業協同組合及び農地中間管理機構の指導及び助言を求めてきたときには、それぞれの組織の役割に応じて、農用地利用改善団体の主体性を尊重しながら、その団体の活動を助長する上で必要な指導及び助言が積極的に行われるように努める。

3 農業協同組合が行う農作業の委託のあっせんの促進その他の委託を受けて行う農作業の実施の促進に関する事項

地域計画の実現に当たっては、担い手が受けきれない農用地について適切に管理し、将来的に担い手に引き継ぐことが重要であるため、農作業受委託の推進に向けて、農業支援サービス事業者による農作業受託料金の情報提供の推進や、農作業受託事業を実施する生産組織の育成、地域計画の策定に向けた協議における農作業受委託の活用の周知等を行うことにより、農作業の受委託を促進するための環境の整備を図る。

4 その他農業経営基盤強化促進事業の実施に関し必要な事項

(1) 農業経営基盤の強化を促進するために必要なその他の関連施策

ア 津別町は、国営農地再編整備事業「津別地区」（平成27年度～令和6年度）による農業生産基盤整備の促進を通じて、農地の大区画化を進めると共に、集出荷施設等の農業近代化施設の導入を推進し、効率的かつ安定的な農業経営を目指す者が経営発展を図っていく上での条件整備を図る。

イ 津別町は、産地生産基盤パワーアップ事業によって農村の活性化を図り、農村の健全な発展によって望ましい農業経営の育成に資するよう努める。

ウ 津別町は、水田収益力強化ビジョンの実現に向けた積極的な取組によって、水稻作、転作を通ずる望ましい経営の育成を図ることとする。農用地利用の集積、とりわけ面的集積による効率的作業単位の形成等望ましい経営の営農展開に資するよう努める。

(2) 推進体制等

① 事業推進体制等

津別町は、農業委員会、網走農業改良普及センター美幌支所、津別町農業協同組合、その他の関係団体と連携しつつ、農業経営基盤強化の促進方策について検討するとともに、今後10年にわたり、第1で掲げた目標や第2の指標で示される効率的かつ安定的な経営の育成に資するための実現方策等について、各関係機関・団体別の行動計画を樹立する。またこのような長期行動計画と併せて、年度別活動計画において当面行うべき対応を各関係機関・団体別に明確化し、関係者が一体となって合意の下に効率的かつ安定的な経営の育

成及びこれらへの農用地利用の集積を強力に推進する。

② 農業委員会等の協力

農業委員会、農業協同組合及び土地改良区は、農業経営基盤強化の円滑な実施に資することとなるよう、津別町地域農業再生協議会等のもとで相互に連携を図りながら協力するように努めるものとし、津別町は、このような協力の推進に配慮する。

5 農地中間管理機構が行う特例事業に関する事項

- (1) 津別町は、北海道一円を区域として特例事業を行う農地中間管理機構との連携の下に、普及啓発活動等を行うことによって同機構が行う事業の実施の促進を図る
- (2) 津別町、津別町農業委員会、津別町農協は、農地中間管理機構が行う中間保有・再配分機能を活かした特例事業を促進するため同機構に対し、情報提供、事業の協力を行うものとする。

第7 その他

この基本構想に定めるもののほか、農業経営基盤強化促進事業の実施に関し必要な事項については、別に定めるものとする。

附則

- 1 この基本構想は、令和5年9月28日から施行する。
- 2 農業経営基盤強化促進法等の一部を改正する法律（令和4年法律第56号）において、同法による改正前の農業経営基盤強化促進法の適用を受けるとされた規定に関するこの基本構想の適用については、なお従前の例によるものとする。